

## アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力の関係性について (整理イメージ案・たたき台)

### 1. アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力の育成について

アクティブ・ラーニングの視点に基づく授業改善については、昨年 8 月にまとめられた「論点整理」の提言を踏まえた様々な取組が広がりつつある一方で、「この型を取り入れなければアクティブ・ラーニングではない」、あるいは「既に話し合い活動やフィールドワークを取り入れているので検討する必要はない」といった、不断の授業改善を促すという提言の目的からはかけ離れた解釈も見受けられるところである。

こうした誤解を解消していくためには、学習活動・指導の在り方のみに着目するのではなく、これからの時代に求められる資質・能力を総合的に育成するためには、各教科等の本質に迫る学びが重要であり、そのために提言されたのがアクティブ・ラーニングの視点(深い学び、対話的な学び、主体的な学び)であるということを示す必要があるのではないか。(別添イメージ図参照)

### 2. 各教科の本質に根ざした「見方や考え方」について

「論点整理」を踏まえ、現在、各教科等を学ぶ本質的な意義について、資質・能力の三つの柱や学習プロセスの在り方について各教科等別 WG で議論されているところである。こうした資質・能力の育成にあたり重要となるのが、各教科等の本質に根ざした見方や考え方(以下「見方や考え方」)が重要であると考えられる。現行学習指導要領においても、各教科の目標の中で、例えば社会科においては「社会的な見方や考え方」、理科においては「科学的な見方や考え方」、美術においては「独創的・総合的な見方や考え方」を培うこととしている。幼児期では、生活全体を通じて総合的な指導を行う中で、ものの見方や考え方等を培うこととされている。

「見方や考え方」とは、様々な事象を捉える教科等ならではの視点や、教科等ならではの思考の枠組みであると考えられる。こうした「見方や考え方」と育成すべき資質・能力の関係について、以下のような整理ができるのではないかと。

- ・「見方や考え方」は、知識・技能を構造化して身に付けていくために不可欠である。「見方や考え方」を働かせながら、知識や技能を習得したり、知識・技能を活用して探究

したりすることにより、知識を他と関連づけて定着させたり、構造化された新たな概念的な知識として獲得したり、技能を熟達させたりすることができる。

- ・「見方や考え方」が成長することにより、思考力・判断力・表現力が育成されていく。
- ・社会や世界にどのように関わるかという点には、「見方や考え方」が大きく作用している。

「アクティブ・ラーニング」の視点との関係については、例えば、「深い学び」は、子供たちが「見方や考え方」を働かせ、それを成長させていけるような学びであると言えるのではないかと。

- ・習得・活用・探究の学習プロセスの中で、各教科等ならではの視点で事象を捉え、各教科等ならではの思考の枠組みを用いて思考・判断・表現することなどを通じて、子供たちの「見方や考え方」が成長していくように、学習をデザインすることが欠かせないと考えられる。
- ・その際、教科等の学習をデザインする視点の一つとして、子供たち一人一人の「見方や考え方」を培う上での困難さを捉え、必要な支援等を工夫し、その成長を支えていくことも重要である。

各教科等の多様な「見方や考え方」が総合的に育成されることによって、社会や世界の様々な事象を捉えたり関わったりすることが可能になり、また、多様な「見方や考え方」を統合的に働かせるようにすることによって、一つの事象を多様な角度から捉えたり考えたりすることができるようになるのではないかと。

### 3. 言語活動、体験活動とアクティブ・ラーニングの視点の関係について

現行学習指導要領において重視された言語活動、体験活動とアクティブ・ラーニングの視点との関係を整理しておくことも重要ではないかと。

#### <言語活動について>

子供は、乳幼児期から身近な人との関わりや生活の中で言語を獲得していき、発達段階に応じた適切な環境の中で、言語を通じて新たな情報を得たり、思考・判断・表現をしたり、他者と関わったりする力を獲得していく。

このように、言語は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤として重要な役割を果たしており、言語能力の向上は、学校における学びの質や、教育課程全体における資質・能力の育成の在り方を左右する、重要な課題として受けとめる必要がある。

従って、言語活動については、アクティブ・ラーニングの視点からの学び（深い学び、対話的な学び、主体的な学び）を支える中核的な学習活動として位置付けることができるのではないかと。言語を用いた言語活動と、資質・能力の育成の関係については、以下のよう

- ・教科等の本質に根ざしたものの見方や考え方の獲得は、各教科等固有の学びのプロセスを通じて行われる。このプロセスにおいては、情報を読み取って吟味したり、既存の知識と関連付けながら自分の考えを構築したり、目的に応じて表現したりすることになるが、いずれにおいても言語を通じて行われる。
- ・学習内容は、多くが言語を用いて表現されており、新たな知識の獲得は基本的に言語を通じてなされている。言語を通じて、知識と知識の間のつながりを捉えて構造化することが、生涯にわたって活用できる概念の理解につながる。具体的な体験が必要となる技能についても、その熟達のために必要な要点等は、言語を用いて伝えられ理解されることも多い。
- ・子供自身が、自分の心理を意識し統制していく力や、自らの思考のプロセスを客観的に捉える力（いわゆる「メタ認知」）の獲得は、心理や思考のプロセスの言語化を通じて行われる。また、言語を通じて他者とコミュニケーションをとり、相互の関係を築いていくことにより、思いやりや協調性などを育むことができる。

### <体験活動について>

人間の生活や発達、周囲の環境との相互作用によって行われるものであり、それを切り離して考えることはできない。様々な他者との交流や具体的な体験を通じて、実際に事象と関わることにより、子供が事象から影響を受け、また、事象に影響を与えることによって、事象に対する疑問や気づきを喚起し、子供の深い学び、対話的な学び、主体的な学びにつなげることができる。こうした体験活動の意義は「社会に開かれた教育課程」の視点からも重要であると考えられる。

こうした体験活動と、資質・能力との関係については、例えば、以下のように考えられるのではないかと。

- ・体験を通じて、断片的な知識が構造化されて理解されたり、実際の文脈において知識や技能を用いることにより、知識がより深く定着したり、技能に習熟することができ

る。特に抽象的な思考がまだ発達していない幼児期や小学校低学年において、直接体験を通じて事象を理解することができる。

- ・実際の生活や社会の場面に即した学びにより、社会生活の中で生かすことのできる思考力や判断力を育んだり、他者や環境との相互作用を通じた学びにより、自らの思考を広げ深める契機とすることができる。
- ・事物や現象に対する疑問や気づきを持つことによって、学びに向かう意欲を喚起したり、自らの思考を客観的に捉えるきっかけにもなる。体験の前に見通しを持つことや、事後に体験したことの振り返りを行うことにより、新たに問題意識を持ち次の学びへ生かしていくことができる。

言語活動や体験活動を、子供の発達の段階に応じた、質の高い深い学びとするため、例えば以下のようなことが必要ではないか。

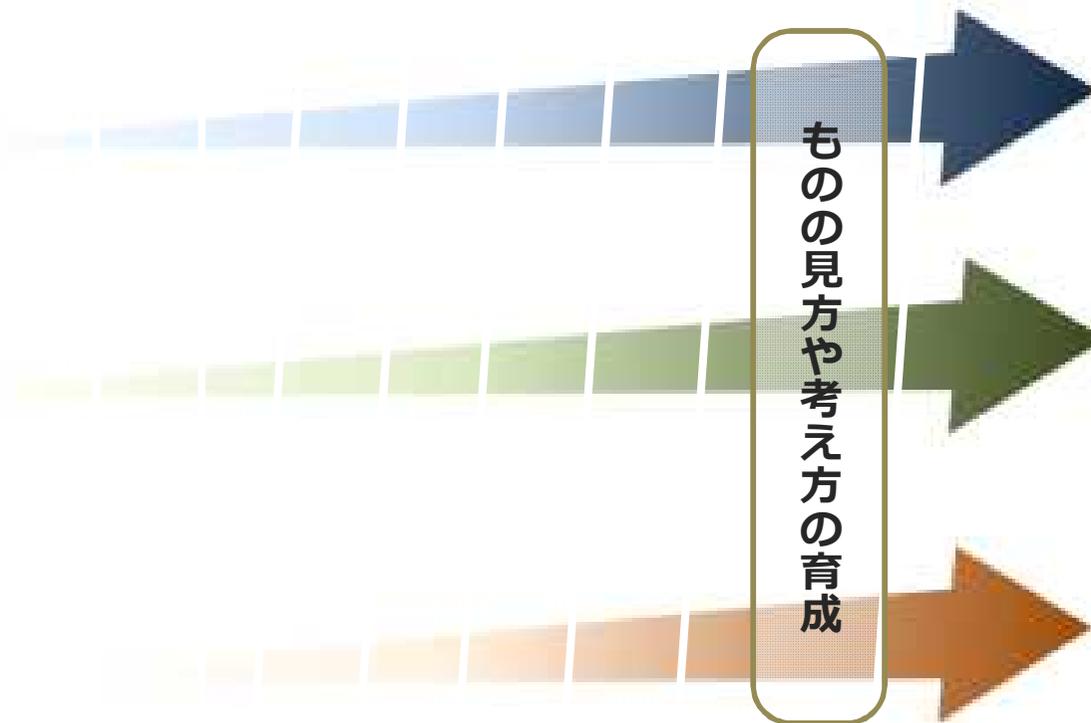
- ・言語活動や体験活動を行うこと自体を目的化するのではなく、言語活動や体験活動をアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導の不断の改善の重要な要素として捉えること
- ・各教科等の本質に根ざした見方や考え方を用いた学習の過程において、言語活動や体験活動を効果的に位置づけること

# 「見方や考え方」を用いた学習と資質・能力の育成(イメージ)

**教科の本質に根ざした  
見方や考え方を  
用いた学習**  
(教科の本質に迫る深い学び (アクティブ・ラーニングの視点) )

**資質・能力の  
育成**

5



概念的な  
知識の獲得

思考力・判断力・  
表現力の育成

情意・態度の  
育成